

時々日報

2008年（平成20年）

10月17日

金曜日

報告会、開催

研究状況、明らかに

発表手法向上に期待感

大阪大学サイエンスシヨップは、十月七日、大阪大学二十一世紀懐徳堂で、中間報告会を開催した。二十名ほどが集まり、科学談義に花を咲かせた。

最初の発表は「チーム3 sec」である。「三秒ルールの真実を探れ！」というテーマで調査を進めている。いきなり配られたのは、質問紙。

この質問紙も一筋縄ではいかない。例えば、このような質問がある。「次のコップに水を少し入れてください」その下にはコップの絵が書いてある。「えっ、こ

れがどのように、三秒ルールに關係するの」と、思わず首をひねりたくなる。

「結果は、報告会の最後に発表します、乞うご期待！」と、チーム3 secの前半の発表は終わってしまった。後半の発表で、どのように謎は解決されるのか。後を引く先制パンチだ。

次の発表は「チーム桜」改め「桜組」である。「温暖化が進む中で、花見はいつまでできるのか」をテーマにしている。「発表だったらパワポ」という、固定観念に対して一石を投じた、というスタッフチーム

の熱き思ひがほとばしる。

その代名詞が「Real Layer System」だ。画像編集ソフトなどで用いられる「レイヤー」をリアルレイズしたシステムである。何やらスゴイものを想像させるが、出てきたのは、日本の地図が手書きされた「模造紙」と「透明ゴミ袋」の束。

桜の歴史の説明が進むと、一枚、また一枚と、桜マークのついたゴミ袋、否、リアルレイヤーが重ねられる。そしていつしか、日本地図は桜で覆われる。その素朴な味わいに会場



業界騒然！？リアルレイヤーシステム

が引き込まれる。けしてスマートではない。しかし、良い発表が、関心を持って見聞きしてもらうこと、何かを感じ楽しんでもらうこと、記憶に残って話題になること、だとすれば、間違いない成功である。

その他にも、先日、本紙で取り上げた世界花見マップ、テレビ番組のパロディー、眼と鼻の先なのに二眼中継レポート、吟詠など、小ネタが盛り込まれる。発表の内容もさることながら、発表スタイルを創意工夫することの大切さ、失敗

をおそれずに挑戦する姿勢が印象的だった。

続くは「Dream Team」の発表だ。「夢のメカニズムを探れ」をテーマにしている。

驚くべきは、その勉強量である。短期間にもかかわらず、生理学などの理系的観点から、精神分析など文系的観点を紹介。「夢をコントロールする」という夢に向けて第一歩を踏み出した。

そして再び「チーム3 sec」が登場。前半で実施した質問紙を、その場で集計して発表した。冒頭のコップの質問は、「少し」というあいまいな表現が、数値にすると「3」になるのではないかと、というものだった。しかし、そうは問屋がおろさない。期待に沿わない結果に「残念」という言葉も飛び交う。チームは、質問紙の練り直しに向かうこととなった。

あるスタッフは「今日の発表会で、互いに刺激を受けたと思う。個人的には吟詠で噛んだことが悔しい。今度は最高のパフォーマンスを」と、次回の発表に向けてのリベンジを誓った。